

深谷散策 渋沢栄一翁の偉大さを知る



4月23日(金)、青天・新緑に誘われ、彩の国(埼玉県)に住む小生、渋沢翁の偉大さの一端を知る深谷散策に出かけました。10時自宅出発、一般道を2時間、『渋沢栄一記念館』着、ここで生い立ちと偉業の概要を知り、次いで近くの生家『中の家』へ、3蜜を避けてのころ合い、隣の麵屋で“煮ぼうとう”の美味を味わい、そして生家～『誠之堂』～『深谷駅』を巡り、帰路は高速で一気に、体力的にほどよい6時間でした。

その一端を記しました。

なお、関心事が湧き出、そのネット検索結果も掲載しております。

大河ドラマ『**青天を衝け**』視聴の一助になれば幸いです。

近代日本経済の父と呼ばれる『渋沢栄一』(1840-1931年)とは

渋沢栄一は天保11(1840)年深谷市の血洗島の農家の家に生まれ、幼い頃から家業である藍玉の製造販売・養蚕を手伝い、父市郎右衛門から学問の手ほどきを受け、7歳になると下手計(生家隣の地名 しもてばか)のいとこの尾高惇忠*(あつただ)のもとへ論語をはじめとする学問を習いに通いました。

20代で倒幕思想を抱き、惇忠やその弟の長七郎、いとこの渋沢喜作らとともに、高崎城乗っ取りを計画しましたが、長七郎は京都での見聞からこれに反対し計画は中止され、その後、喜作とともに京都へ向かい、一橋(徳川)慶喜に仕官することになりました。

一橋家で実力を発揮した栄一は27歳の時、慶喜の弟徳川昭武に随行し、パリ万国博覧会を見学し、欧州諸国の実情に触れることができ、明治維新となって帰国すると日本で最初の合本(株式)組織「商法会所」を静岡に設立し、その後明治政府の大蔵省に仕官。ここで富岡製糸場設置主任として製糸場設立にも関わりました。

大蔵省を辞めた後、一経済人として株式会社組織による企業の創設・育成に力を入れるとともに「道徳経済合一説」を唱え、「日本最初の銀行」第一国立銀行(現みずほ銀行)をはじめ、約500もの企業の設立に関わり、また約600もの社会公共事業、教育・福祉機関の支援と民間外交にも取り組み、数々の功績を残しました。

(尾高惇忠：江戸後期の豪農、幕末の志士、明治時代の実業家。富岡製糸場の初代場長)

「中の家(なかんち)」 渋沢翁の生家

渋沢一族はこの地の開拓者として、分家して数々の家を起こし、その一つで、この呼び名は位置関係に由来しているとか…

「名字帯刀」も許され、代々農業を営み裕福であった。この家に栄一が生まれた。



“煮ぼうとう”



渋沢翁は、生前地元に戻った時、「“煮ぼうとう”を食べたい」と言って「中の家」で地元の人と一緒に食べたと言われています。

“煮ぼうとう”は地元では“にぼうと”と発音していたそうです。

渋沢翁が地元の人にあまり気を遣わせたくないと思っただけなのではないかと…

これは、渋沢翁が愛読した『論語』の中に「忠恕（ちゅうじょ）の精神」（真心と思いやり）につながるものとも考えられています。

“ほうとう”は武田信玄が野戦食として用いたと伝えられている「山梨名物」が有名ですが、ほぼ同じ料理で深谷の郷土料理でもあります。

剣 道

「渋沢家や尾高家の男子は皆文武両道を治めるのが家風であった。中でも2歳上の長七郎は22歳で免許皆伝になるような天才的な剣の使い手であり、農閑期には栄一は家業の藍商もかねて長七郎の後に従い栃木、群馬方面に他流試合に出かけるのが常であった。また彼らの師である大川平兵衛に随行することもあり、彼らの精妙で神技に近い剣術を目の当たりにしていたのである。

このころの栄一を、孫の渋沢華子はその著書で「胴長短足小太りで、腕力は強く米俵の一俵はかるがると持ち上げるが、剣術は苦手だった」と記している。

その後、栄一は24才にして志士として江戸に出、漢学塾と千葉道場入門。そのねらいは「読書・撃剣*などをする人の中には、自然と良い人がいるものだから、抜群の人々を撰んでついには己の友だちにして、何かことある時に、その用意をして置かなければならないという考えであった」という。

その後、撃剣の取り持つ縁で一橋慶喜の家来となったときそのねらいは的中。

慶喜に認められ、その後の人生を決定的なものにしたのは、「幕府の小栗上野介が農民兵を募集したそれにならう」、一橋家領地備中板倉で歩兵志願者を募り農兵を組織したことであった。当初一人も集まらず、栄一は思案の末、村民の信頼を得るために当地の「読書撃剣の知性人」を求め会談と撃剣試合を実施し大いに語り合い痛飲した。それが「今度来ておるお役人は学問もあり、撃剣も強い」という評判になり、これを契機に続々と歩兵志願兵が集まって慶喜の絶大なる信頼を受けることになった。

（撃剣： 刀剣・木刀・竹刀で相手をうち、自分を守る武術）

書 道

渋沢翁は後年社会的名望を得てからは、人々に請われて揮毫することが多かったようです。若い頃の書よりも老境に入ってからの方が、より多く今に伝わっています。

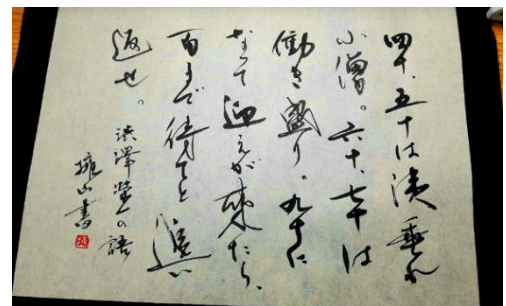
手習いの初めは、まず父市郎右衛門の文字を手本とし、さらに教場を開いていたおじに当たる渋沢誠室の教えを受け、「栄さんはなかなかうまい。おれの後が継げるよ。」とほめられたといひます。

「四十、五十は澁垂（はなた）れ小僧

六十、七十は働き盛り

九十になって迎えが来たら、

百まで待てと追い返せ」



語 学

栄一が世に出るきっかけとなったのは、1867年にフランスの首都パリで開催された万国博覧会でした。将軍代理として参加した徳川昭武（徳川慶喜の弟で当時14歳）のお供の一人として参加した栄一は、パリへ渡る船の中でフランス語を学びました。

同行して教えた通訳は、長崎出島の商館医で多くの蘭学者を育てたシーボルトの長男アレクサンダー、帰国後も交流が続き、後には事業の協力者となっています。

フランスについてからも語学教師について学び、1 か月ほどでフランス語会話を習得してしまいました。

栄一が、資本主義システムをはじめ多くのことをフランスで学ぶことができたのは、まず、はじめに語学力を身につけるという“先見の明”があったからに違いありません。

レンガ

「レンガのまち深谷」のレンガ史は、栄一が明治 20（1887）年につくった日本煉瓦製造会社の工場に始まります。

工場は、ドイツ人技師チーゼを招いて操業を始め、明治から大正時代の代表的なレンガ建築である、司法省(現法務省)・日本銀行・旧東京裁判所・旧東京商業会議所・赤坂離宮・旧警視庁・東京大学・東京駅などに使われました。

レンガは、深谷で良質な粘土が取れ、古くから瓦の産地として知られており、さらに利根川の水運や鉄道も利用できる好条件がありました。

さて、日本の近代建築を支えた深谷のレンガですが、大正 12（1923）年の関東大震災で耐震性が問題になり、需要が激減、建築資材はレンガからコンクリートへと代わり、レンガはもはやガーデニングや装飾くらいしか使われなくなりました。

セメント

秩父にある武甲山の石灰石に注目した諸井 恒平(もろいつねへい)は、親戚である栄一にセメント事業を起こすことを相談。栄一の援助を受けた諸井は、大正 12（1923）年に秩父セメント会社を設立。会社は順調に発展し、合併などを経て、今なおセメントを作り続けています。昭和 31（1956）年に完成した第 2 工場は、生産性の高さと美しさを兼ね備えた名建築として知られています。

ここで生産されたセメントは鉄道で運ばれ、東京の近代化に使われました。

渋沢が設立にかかわった現在の企業等(186 社) 抜粋

IHI	KDDI	JTB	アサヒ・サッポロ・麒麟ビール	
いすゞ自動車			小田急電鉄	川崎重工業
共同通信社			京浜急行電鉄	実業之日本社
商船三井			太平洋セメント	帝国ホテル
東京証券取引所			東京都水道局	日本銀行
日本郵船			大成建設	東京地下鉄
東宝	日本放送協会		日本経済新聞社	日本商工会議所
函館市電・バス			東日本旅客鉄道	毎日新聞社
三井住友銀行			三菱重工業	理化学研究所 …

教育や社会福祉事業

渋沢は若者の教育にも力を入れ、学校の支援に携わっています。その代表的なのが、早稲田大学、一橋大学、日本女子大学などです。

また、社会福祉分野での活躍も目覚ましく、明治 7（1874）年から生活困窮者、高齢者、障害者を支援する「東京養育院」に参与し、同 9 年には事務長に任命されます。その後、同 23 年に東京市営となった東京養育院の院長となり、91 歳で亡くなるまでの約 50 年間院長を務めました。

この福祉事業は、今の東京都健康長寿医療センターの設立につながっています。

誠之堂 国の重要文化財

誠之堂は、大正5(1916)年、渋沢翁の喜寿を祝って第一銀行の行員たちの出資により建築されました。

翁は、株式会社組織による企業の創設・育成に力を入れ、日本の近代経済社会の基礎を築きました。その拠点としたのが第一国立銀行、明治29(1896)年、同行は第一銀行となり、その初代頭取を務めました。

栄一は、喜寿を迎えるのを機に、第一銀行頭取を辞任しましたが、同行の行員たちが出資を募って誠之堂を建築したことには、栄一が行員たちから深く敬愛されていたことが伺われます。

「誠之堂」の名は、栄一自身により命名されました。

儒教の代表的な經典のひとつ「中庸」の一節「誠者天之道也、誠之者人之道也(誠は天の道なり、これを誠にするは人の道なり)」にちなんだものです。

誠之堂は、東京都世田谷区瀬田にあった第一銀行の保養・スポーツ施設「清和園」の敷地内に建てられていたものを現在地に移築・復元したものです。

レンガ構造物の移築は、日本でも初めての試みのため、移築方法などの検討を重ね、「大ばらし」を応用した日本初の工法により実施することを決定。これは、レンガ壁をなるべく大きく切断して搬送し、移築先で組み直す工法。平成10年(1998)2月からの解体・復元工事を経て、同11年8月に完成した。



渋沢栄一記念館



深谷市では、日本煉瓦製造会社の設立をはじめ、日本近代産業の指導者であった渋沢翁の功績を顕彰するため、翁の生地に近い、下手計に「渋沢栄一記念館」を設置し、翁の肉声テープをはじめ、多くの資料を展示しています。

ここには、講義する翁のアンドロイド(人造人間)も展示されていました。

また、「渋沢栄一翁の顕彰とレンガを活かしたまちづくり」を推進し、深谷駅など市の代表的な施設は必ずレンガ調にすることとしています。

新1万円札・旧札にも

2024年発行の新1万円札の図柄に、渋沢翁が第一国立銀行など数多くの企業を設立、日本の資本主義の父とされたことから採用されています。

紙幣の図柄としては二度目。

最初は、明治35(1902)年の第一銀行が韓国政府から許可され発行された紙幣、「第一銀行券」と呼ばれ、1・5・10円の三種類。渋沢がその当時頭取であったことが理由といわれています。



1・5・10円の三種類。渋沢がその当時頭取であったことが理由といわれています。

夫人と子

先妻 千代 1844-1882年 安政5(1858)年結婚
尾高惇忠の妹 コレラ感染で亡くなる 二男三女
後妻 兼子 1852-1934年 明治16(1883)年結婚
川越の豪商だった伊藤八兵衛の次女 三男一女

栄一翁の雅号『青淵翁』 位階勲等爵位は正二位勲一等子爵

栄一が、家業である藍玉の製造を手伝っている夏の昼過ぎのこと。作業で汚れた手を川で洗っていると、機織り機の音・糸釜の煙・いっぱい広がる桑の葉(血洗島では養蚕も盛んだった)、その先には赤城山・榛名山・妙義山、更に先には浅間山といった荘厳な山々が見えていました。この自然豊かな故郷の中で、大人君子の心の様に綺麗に澄んでいる川が、あくせくと働く栄一の心を慰めてくれるように思え、その時に自分の号を「青淵」と名付けたといひます。(他、諸説あり)

現在、「中の家」の北側は「青淵公園」として整備されています。

渋沢栄一翁 夢七訓 <<麵屋の箸袋に記載>>

夢なき者は 理想なし

理想なき者は 信念なし

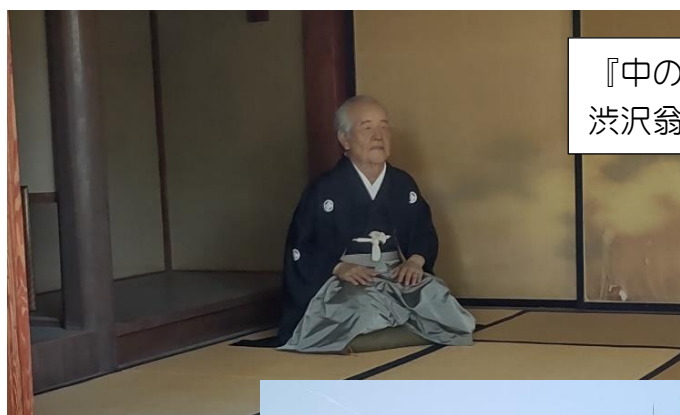
信念なき者は 計画なし

計画なき者は 実行なし

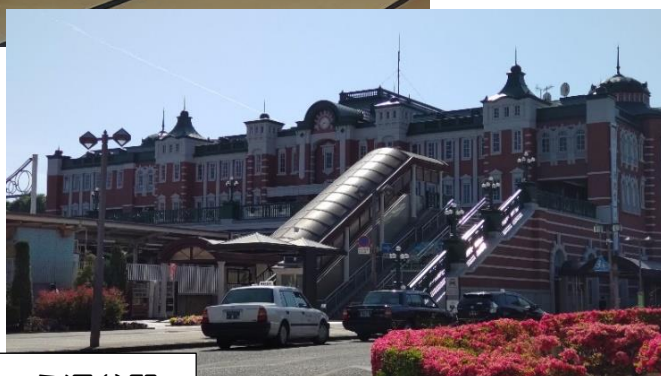
実行なき者は 成果なし

成果なき者は 幸福なし

幸福を求める者は 夢なかるべからず



『中の家』に展示してある
渋沢翁のアンドロイド



三二東京駅ともいう深谷駅

